

これは

富野由悠季からの 警言鐘である

今一度問う、君は生き延びることができるか



本誌連載中の「教えて下さい。富野です」で行われた歴代の対談、約8年分を一挙単行本化した話題作。

富野由悠季が、そのとき気にかかっている社会のあらゆる現象・問題にアプローチしている。過去の対談を読み直すと非常に鋭い指摘がされていることに気付くだろう。環境、教育、政治：テーマは多岐に渡る。最近で特に注目したのは、エネルギー問題。「ガンダム」を生んだ男ならではの見解が、そこにはある。

ガンダム世代への提言

富野由悠季対談集

I / III

単行本コミックス/B6判
各1470円(税5%込) / 発売中

発行:角川書店 発売:角川グループパブリッシング

■お近くの書店に無い場合は、角川グループ受注センター読者係(049-259-1100)までお問い合わせください。

■インターネットでもお買い求めできます。(角川書店HP) <http://www.kadokawa.co.jp/>

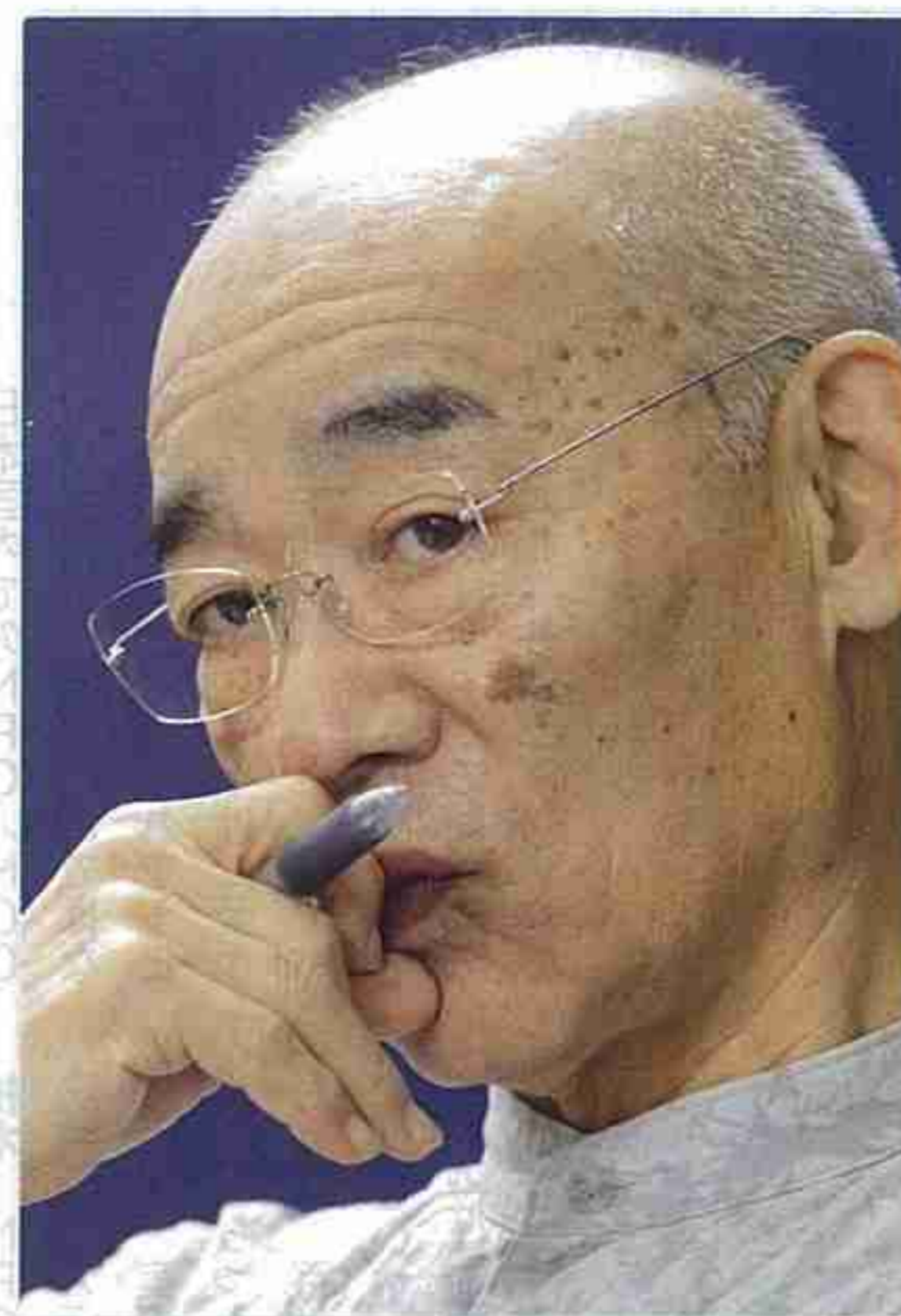
教えて下さい。 富野です

達人たちによるガンダム世代への提言
Text by Yohel Malta Photo by Chisato Hikita



公益社団法人
CIVIC FORCE事務局長
根木佳織

富野由悠季



とみの・よしゆき 1941年11月5日生まれ。神奈川県小田原市出身。日本大学芸術学部出身。フリー演出家、アニメーション監督、作家、小説家。代表作は「機動戦士ガンダム」シリーズ、「伝説巨神イデオン」、「聖戦士ダンバイン」など。

災 害支援組織であるCIVIC FORCE(シビックフォース)は、東日本大震災発生の翌日にはヘリコプターで被災地を視察。即刻支援に乗り出しました。行政、企業、さまざまなNPO/NGOと連携し、支援物資の調達・配送、仮設風呂の設置事業からそのメンテナンス、離島へのカーフェリーの就航、セルフレスキュー、被災犬支援、カーシェアリングから女性や外国人支援まで、驚くほど多岐にわたる支援をなされています。その機動力とアイデアは一体どこから生まれるのでしょうか？ また、冬を迎える被災地の現状はどうなっているのか、今後の支援に必要なのは何なのかを事務局長の根木佳織さんに伺いました。

支援もあり、人もいるのに、それがうまく回らないのは、 企業とNGOと行政をつなぐ調整役が不在だから。 NPOに求められる役割はそこなんです



ねぎ・かおり 1976年京都生まれ。大阪外国語大学国際関係学科(トルコ語)卒業。国際協力NGOのピースウィンズ・ジャパンにて、イラクやアフガニスタンなど世界各地での支援活動に従事。その後、シビックフォースで国内の災害支援に尽力している。

日本と海外では災害支援のあり方が全然違う。大事なのは調整役

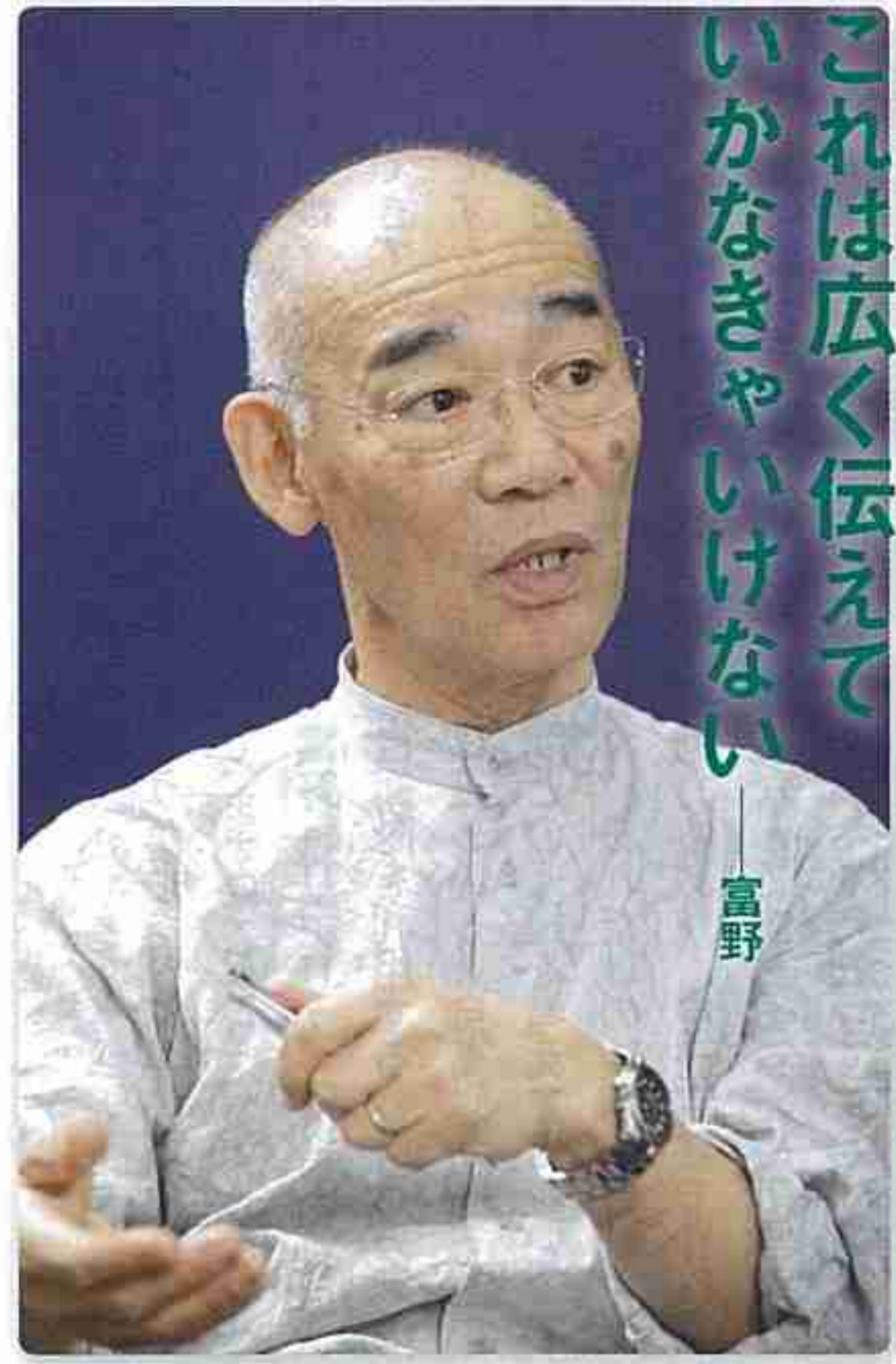
富野 シビックフォースは、2011年3月11日の震災の翌日には、ヘリを飛ばして被災地へと向かっています。私的なNPOでそんなにも早く動いたのはなぜなのでしょう？

根木 私は、以前はピースウィンズ・ジャパンという国際NGOに所属して、アフガニスタンやイラクなどの海外の人道支援にたずさわっていました。海外で活動していると、家族を含めて周りの人たちに、日本で大きな災害が起こったときに、支援活動はするのかと聞かれることがあるんですよ。多分、そういう状況でも、私は日本で活動するだろう。その場合、日本と海外では支援のあり方が全然違うことに気づきました。

海外の場合は、アフガニスタンでもイラクでも、無政府状態になっているので、私たちも何もない状態から自分たちの資金で事業を作り上げ、展開する。事業立案から実施まで自己完結できることが何より美しい支援の形だとされるんです。

でも、日本では災害支援で出てくるのは私たちだけではない。企業も個人も支援してくれます。政府も地方行政もあって、そこで舵がとられることになりました。いろんな方が役割分担していくなかで、いわゆるNPO/NGO単体の力は非常に限られてくるわけです。

では、そういう状況でNPO/NGOの使命は何だろうと考えたときに、一番必要なのはいろんな方々の支援を調整する機能ではないかと気づいたんです。04年の新潟県中越地震のときには、私も現地に行きました。メディアが体育館で寒さに震えるおばあさんを報道すると、翌日にはものすごい数の毛布が届くんです。でも、それを置く場所がない。倉庫からあふれ、仕方なく外に出したものが雨さらしになり、結局、使えなくなってしまう。そこから歩いて行ける距離の体育館では、いまだに



これは広く伝えて
いかなきゃいけない

そういう現場の状況をメディアは 伝えない。今日の話は驚きばかり。

行政の復興の過程における地域
崩壊というのは、現場を見てい
るとものすごく感じます。そう
でなくても被災者の方々は、非
日常的な光景を目の当たりにし
て、身内や親しい人を亡くされ
ているわけです。そういった心
身の傷に加えて、仕事はなく
なり、家も流されたという将来
的な不安もあります。そんな彼
らに、私たちはどういう支援が
できるのだろうかと考えたと
今は非常に難しい局面に入っ
てきたと感じざるをえません。

1つと出て、とにかく早くたく
さん送らなきゃいけないと動い
ていました。もちろん、それに
ともなった問題はたくさんあり
ましたけど、今考えるべき問題
とは使う脳味噌が全然違うん
ですよ。

自衛隊と民間との連携は 今後の災害支援において 必要不可欠になる

富野 このような機会を設けて
いただいただけで、本当にあり
がたいです。

富野 もしかしたら今後半年、
1年が一番しんどいのもしれ
ませんね。そういう認識を全く
持っていないだったので、正直驚
きです。

富野 根木さんは海上自衛隊の
幹部学校で講話をなさってます。
これも一体何だと思ってたんで
す。たとえ根木さんが国際支援
の経験も豊富な人道支援に関し
てのプロフェッショナルだとし

富野 あははは。
根木 要は、船を貸してほしい
ということなんです。ヘリを飛ばし
てみて一番苦労したのが、どこ
に着陸させるかということだっ
たんです。それで、おおすみ型
輸送艦を貸してほしいとお願い
をしました。

富野 大変納得します。
根木 それでお互いを知るため
に自己紹介をして、こういう災

富野 たしかに自衛隊は災害支
援のプロだと思います。ただ、
これまでの国内の災害支援の9
割方の活動は、陸上自衛隊がし
ているといえます。海上自衛隊
はたくさんリソースを持って
いるにも関わらず、災害時の稼働率
は低い。なので、海上自衛隊は
我々の傘下に入って協力しよう、
というような講話をさせていた
だきました(笑)。

り、誰と話せば話が早く進むの
かがわかったわけです。それに
しても袋井市が引っかけたとい
うのはさすがですね。この8
か月で初めてですよ。そこを指
摘されたのは。

富野 だって、3月23日までの
プレスリリースにはそんな説明
一切ないですよね。そういう意
味ではヘリコプターをどうやっ
て確保したのかも不思議でした。
普通あの状況で、民間のNPO
がヘリなんて飛ばせられるわ
けないんですよ。

富野 そういって訓練をしてい
なければ、民間人がヘリの周りで
何かやるなんて無理ですもんね。
そういう意味では、袋井市がキ
ーになっていったんですね。



震災から8か月が経ち、今、 浮上してきたのは精神面での問題 非常に難しい 局面に入っています

根木

富野 震災から8か月(対談時)
が経ちましたが、ずっと被災地
で活動をなさっていて、現時点
での一番の問題はどういうもの
でしょうか？

富野 やっぱ、思いなんです
ね。全部が全部お金で動くわけ
じゃない。それにしても、よく
あんな自由な飛行コースがとれ
ましたね。日本の航空法ってか
なり厳しいじゃないですか。

富野 震災から8か月(対談時)
が経ちましたが、ずっと被災地
で活動をなさっていて、現時点
での一番の問題はどういうもの
でしょうか？

富野 今はいよいよ精神的な面
の問題が大きくなっていると思
います。今回は、地震よりも津
波の被害が大きかった。津波の
被害というのはたとえ隣同士で
も、ちよつとした地形の違いで
被害の大きさがものすごく違っ
てくるんです。隣にはある程度
高額の支援と物資が送られてく
るのに、自分のところにはない

富野 ただ、今までに阪神も中
越もあつたわけで、多少は海上
自衛隊も現場を見知ってるだろ
うし、ヘリも飛ばしているわけ
です。あれだけの装備を持って
るんだから当然彼らだって自覚
してると思ってたんですけど、
今まで災害支援に対して、積極
的に海上自衛隊が持っている装
備を運用しようという発想はな
かつたんですかね？

